

北谷区

宝満山の西北斜面の山麓に開けた集落である。標高約200mにあり、福岡市も眺めることが出来る。宝満山からの清流を各家に取り入れ、日常の生活に使用したり、防火用水として水飢饉の時も流さぬように貯えたり、水田にはくまなく水がかかるようにと、先人の知恵が各所に光る。現在、泉水を中心に宝満石やシャクナゲを配す庭を持つ家が多い。

市内の中では水田の面積が最も多い地区で、氏神様や祠、お堂など、昔の村の様子を比較的良く残している。歳月を経た木々もそれらの傍らに多い。

| No. | 樹木名 | 直径 (m) | 周囲 (m) | 樹高 (m) | 枝 張 り | | | | 備考 |
|-----|--------|------------------|--------------|-----------|-------|------|-------|------|--------------------|
| | | | | | 北 | 東 | 南 | 西 | |
| 1 | カエデ | 0.46 | 1.56 | 10.10 | 4.58 | 4.23 | 5.55 | 6.00 | 竈門神社新宮 |
| 2 | アラカシ | 0.52 | 1.95 | 15.60 | 4.75 | 5.00 | 4.40 | 4.05 | 竈門神社新宮 |
| 3 | モッコク | 0.25 | 0.90 | 7.90 | 3.29 | 2.50 | 2.55 | 2.80 | 竈門神社新宮 |
| 4 | サルスベリ | 0.22 0.23 | 0.82 0.76 | 8.55 | 3.80 | 3.00 | 4.70 | 2.90 | 竈門神社新宮 |
| 5 | キンモクセイ | 0.18 0.21 | 0.60 0.69 | 9.90 | 2.42 | 3.10 | 3.40 | 3.95 | 竈門神社新宮 |
| 6 | イヌガヤ | 0.30 | 1.14 | 15.90 | 1.90 | 3.15 | 4.30 | 5.33 | 竈門神社新宮 |
| 7 | マテバシイ | 0.37 | 1.35 | 9.50 | 2.90 | 1.90 | 2.35 | 2.04 | 竈門神社新宮 |
| 8 | スギ | 0.36 | 1.13 | 12.30 | — | — | — | — | 竈門神社新宮 |
| 9 | マテバシイ | 0.33 | 1.22 | 11.10 | 2.50 | 2.38 | 3.90 | 3.64 | 竈門神社新宮 |
| 10 | イヌマキ | 東西0.29 南北0.42 | 1.28 | 12.40 | 2.70 | 3.10 | 3.65 | 3.80 | 竈門神社新宮 |
| 11 | モミジ | 0.26 0.20 | 0.89 0.79 | 10.60 | 3.53 | 4.30 | 3.75 | 5.35 | 竈門神社新宮 |
| 12 | スギ | 0.43 | 1.55 | 16.60 | — | — | — | — | 竈門神社新宮 |
| 13 | ヒノキ | 0.44 | 1.67 | 22.45 | — | — | — | — | 竈門神社新宮 |
| 14 | クスノキ | 0.50 | 1.93 | 21.30 | 8.30 | 4.15 | 4.40 | 4.40 | 竈門神社新宮 |
| 15 | クスノキ | 0.45 | 1.67 | 22.30 | 5.85 | 2.60 | 8.80 | 5.70 | 竈門神社新宮 |
| 16 | モッコク | 0.33 | 1.25 | 13.60 | 5.13 | 6.90 | 3.02 | 3.65 | 竈門神社新宮 |
| 17 | タブノキ | 0.73 | 2.23 | 10.10 | 5.58 | 2.73 | 5.20 | 3.19 | 竈門神社新宮 空洞有り |
| 18 | アラカシ | 0.50 | 1.60 | 19.30 | 4.45 | 7.50 | 4.55 | 8.00 | 竈門神社新宮 |
| 19 | アラカシ | 0.40 | 1.45 | 15.00 | 4.55 | 2.00 | 4.80 | 6.15 | 竈門神社新宮 斜め立ち |
| 20 | アラカシ | 東西0.30 南北0.39 | 1.28 | 17.20 | 7.60 | 5.20 | 7.00 | 6.47 | 竈門神社新宮 |
| 21 | イスノキ | 0.45 | 1.58 | 17.90 | 5.90 | 7.40 | 8.10 | 7.50 | 竈門神社新宮 |
| 22 | アラカシ | 0.30 0.25 | 0.93 0.87 | 計測不能 | 計測不能 | 5.45 | 計測不能 | 計測不能 | 竈門神社新宮 岩の上、空洞有り |
| 23 | アラカシ | 0.56 | 1.84 | 18.70 | 3.30 | 4.90 | 11.00 | 6.70 | 竈門神社新宮 |
| 24 | タブノキ | 0.52 | 1.62 | 11.30 | 9.60 | 0.00 | 3.73 | 9.30 | 竈門神社新宮 |

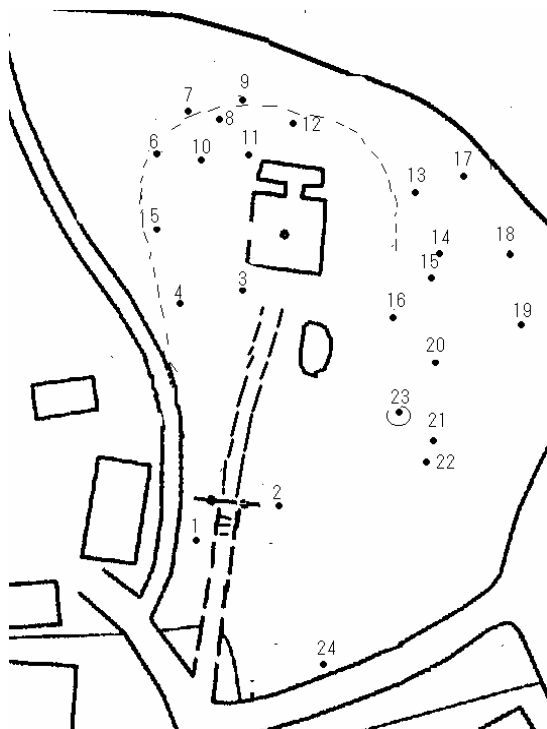
| No. | 樹木名 | 直径 (m) | 周囲 (m) | 樹高 (m) | 枝 張 り | | | | 備考 |
|-----|-----------------|------------------|-----------|-----------|-------|------|------|-------|----------------------|
| | | | | | 北 | 東 | 南 | 西 | |
| 25 | カヤ | 0.40 | 1.80 | 6.40 | | | | | 4本に分枝 庚申尊天そば |
| 26 | カエデ | 0.43 | 1.33 | 13.25 | 4.30 | 1.70 | 5.50 | 6.80 | 西行の碑そば |
| 27 | アラカシ | 東西1.00 南北0.70 | 2.90 | 20.10 | 2.90 | 6.15 | 7.75 | 10.80 | 貴船神社 |
| 28 | アラカシ | 0.38 | 1.25 | 15.50 | 2.40 | 4.00 | 4.50 | 4.50 | 貴船神社 |
| 29 | タブノキ | 1.20 | 3.17 | 10.20 | | | 4.68 | | 平島孝吉氏宅 |
| 30 | マテバシイ (マタジイ) | 0.85 1.00 | 1.80 | 11.40 | 3.40 | 4.30 | 4.20 | 4.30 | 0.60m上から二股 北谷公民館下 |
| 31 | 唐椿 | | 8.50 | 3.80 | 0.00 | 4.30 | 4.65 | 2.70 | 枯死 |
| 32 | ヤブツバキ | | | 計測不能 | | | | | お宮の前 |
| 33 | シイ | | | 計測不能 | | | | | 平島家のヤネの続 きに在り |

竈門神社新宮

北谷の集落の一段高いところにある。山間なので樹木が多く、御笠川の源流から引き込んだ細い流れのせせらぎが聞こえる清々しいお宮である。今もなお、元旦早朝に初詣の人に御神酒をふるまうイタジキヌクメという行事をはじめ、春・夏・秋の氏子のおこもりなど、社祭や古い習俗もいろいろ残っている。一般に竈門神社遥拝所と言われている。



竈門神社新宮参道



竈門神社新宮境内図



No.16 モッコク

No.21 イスノキ



No.25 カヤ



No.26 カエデ



No.29 タブノキ



No.30 マテバシイ

カシ

ブナ科

カシは堅い木のことで、二つを合わせて和字の「榿」が作られました。この辺りで最も一般的な榿の木はアラカシで、棒ガシと呼ばれて家の生垣に使われているカシも実はこのアラカシなのです。棒ガシ—アラカシは関西以西で使われ、関東地方になるとシラカシが生垣や防風林に使われます。

シラカシは葉の裏が白っぽく、材も白いので、この名が付けられたようです。対してアラカシはシラカシに比べてゴワゴワとした硬い感じの葉を持つことから、この名が付いたのでしょう。

イチイガシは高さ30メートルもの巨木になります。カシ類のドングリは食用になりますが、その前に水に晒してアクを抜かなければなりません。しかし、イチイガシのは、そのまま食べることが出来ます。

さて、これら榿の木は、前述したように木が堅いので農機具、かんなの台、船の櫓、機械など様々な用途に使われます。

昔から私たちの身近にあったカシ類は、照葉樹林を構成する主要な樹木の一つです。

(大隈和子)



No.27 アラカシ

あの日の出会いから 「椋の会」への序章一

著名な植物学者長田武正先生にはじめてお会いしたのは昭和 55 年夏、働く婦人の家の研修室で行われた読書会でした。テキストが著書「野草の自然史」で、観世音寺区にお住まいの著者が会場に来てくださったのです。

簡単な挨拶のあと 20 人ほどいた会員それぞれに配られたルーペで、用意された色々な野草の中から好きなものを選んで観察するように言われました。初めてルーペを手にしてのぞいた時の驚き。日頃は目にも留めないハコベの花が細部まで拡大されて瑞々しく輝いています。この感動が私の植物学入門事始でした。

その日のご縁となり、植物に関心を深めた有志達で馬場区にある石穴神社境内の植物相の調査を始めました。先生の指導を受けながら採取、標本作り、学名調べ、報告書の作成まで二年余りの学習は専業主婦の私たちの目を自然界へと広げる得難い体験だったと思います。纏めた小冊子の序言に、先生は「石穴神社は、奥の院の鬱蒼とした照葉樹林や林下の草木相まで、昔の里の姿をそのまま残す貴重な森…」と推称され、大切に保存して欲しいと述べられています。ささやかな冊子でしたが意外に反響を呼びました。調査に関わった私達6人もこの神社の背後にできた新興団地に入居したばかりの新住民で、付近では小、中学校や住宅団地の建設などがまだ続いている状況でしたので、先生のその言葉は胸に強く響いたのです。

さすが古都大宰府です。この頃でもまだ、昔からあちこちにある鎮守の杜、路地、御笠川の畔などに枝を伸ばしている大樹が目につきました。この景観が変わらないように、今のうちにこれらの所在地や名前、形状など記録しておけば保存の一助になるのではないかと考えました。だがこれはなんと遠大な計画でありましょう。なにしろ相手(樹木)はどこに、どれほどあるのかもわからない。土地勘もない私たち 2~3人ではどうい人手が足りない。その上、頼みの綱の先生はライフワークの総仕上げとして予定しておられたイネ科の大図鑑の執筆に取り掛かっておられ、これ以上大切なお時間を奪ってはいけない…などと迷っている私達を先生は都府楼近辺に連れて行き、目ぼしい樹の前に立ち止まり、樹の名前や判別の手掛かりなどを教えてくださいました。ゆっくり歩を進められる先生の姿を見ているうちに、心が静まり、自然が相手なのだから急ぐことはない、出来ることからやっといこうと心に決めたのです。

昭和 60 年頃から市制 10 周年記念事業で市史の編纂が開始され、第 2 巻の民俗資料編に関わることになり、事態は吉方に向かいました。太宰府の生き字引とよばれる、ハ尋千世さんも一緒に仕事をすることが多くなり、聞き取りの合間には目ぼしい大樹を探しました。指定された 20 地区を幾度となく訪ね、古老たちの話を聞いているうちに今まで平面的であった太宰府の姿がだんだん立体化し、地域の氏神様を中心にして自然の流れに逆らわず暮らしてきた人々の生活が見えてきました。今もある鎮守の杜、あちこちに残る大樹たちもその中で生きていたのだということも。

市史の仕事も一段落した頃、当時市文化財管理指導員であった大隈和子さんが計測機器など持ち込んで協力を申し出られ、本格的な調査が進むようになりました。総勢 7 人で「椋の会」と言う名称をつけて発足した時、暦はすでに平成の時代になっていたのです。

それから数えても今日まで十数年、長い長い歩みでした。

(中島 伊佐子)